

# 東南アジアの伝統的国家システムと 国際システム

福 田 教 代

## 目 次

はじめに

第一章 伝統的東南アジアの形成

第一節 伝統的東南アジアの時期

第二節 東南アジアの伝統的国家の形成

第二章 伝統的東南アジア国家の特徴

第一節 大陸部の伝統的国家の特徴

第二節 ヴェトナムの特殊性

第三節 海域部の伝統的国家の特徴

第四節 伝統的国家に共通する特徴

第三章 東南アジアの伝統的国際関係

第一節 伝統的国際システム

第二節 大陸部の伝統的国家の国際関係

第三節 海域部の交易国家と国際関係

第四節 東南アジアの伝統的国家の国際関係における共通する特徴

第四章 東西交易の集散地であった伝統的東南アジア世界

第一節 東西交易の影響と東南アジア世界の発展

第二節 東南アジアのイスラム化

おわりに

## は じ め に

「東南アジアの歴史」というと、15世紀ごろにポルトガルが香辛料貿易の独占を目指して東南アジア地域に進出してきたあと、ヨーロッパ列強がこの地域の諸国をタイを除いてすべて植民地化した以降の歴史を指すこと

が多い。しかし、東南アジアの歴史をそのように底の浅いものとして捉えてしまうと、現在の東南アジア諸国の動き（アジア太平洋地域におけるリージョナリズムの原動力としての ASEAN の働き）を包括的に捉えることができなくなる。

現在の東南アジアは、ASEAN (Association of Southeast Asian Nations) を発足させ、今日までに東南アジア地域の諸国家をすべてこの機構の中に取り込んだ。そして、ASEAN は、アジア太平洋地域にあってこの広大な地域が擁する諸国をひとつにしようとする接着剤の役割を果たしつつある。しかし、このような ASEAN の成り立ちを理解するには、西力東漸以降の東南アジアの歴史を知るだけでは不十分であると考えられる。

現代における国家間統合の典型あるいは成功例としてあげられるのは、いうまでもなく欧州同盟 (EU)<sup>(1)</sup> であるが、今日の統合に至ったヨーロッパ（とくに西ヨーロッパ）の歴史的背景は、5、6 世紀に始まるフランク王国の時代、および 11-14 世紀のいわゆる自由都市国家の中世期ヨーロッパにおける「ヨーロッパ形成」まで溯って考察しなければならないであろう。また、ギリシャ・ローマ文化、キリスト教文化、ゲルマン文化の三要素がヨーロッパ人に共通する意識基盤だとされることもまた、20 世紀後半の統合運動の背景に「ヨーロッパ」という共通意識があったことを裏書きするものである<sup>(2)</sup>。

東南アジアの地域統合（リージョナリズム）は、しばしば本物ではないとか、脆弱であるとか指摘されるが、それはヨーロッパ典型主義の発想であって、世界諸地域で今後発生するであろう統合運動は、それぞれ固有の歴史文化的背景をもち、個性的な形態をとって進むと考えるべきであろう。言い換えれば、それなりの共通利益、共通意識を歴史的に育んできた地域に、それなりの統合運動の可能性があるということであろう。

そのような意味で、筆者は、東南アジア 10 カ国が政治的軍事的対立や体制の相違といった曲折を越えて ASEAN に結集した背景に、現在の要因の他に、何らかの歴史的要因が、それも遠い歴史的要因があるのではないか

との仮説をいできてきた。また、その歴史的要因とは、ヨーロッパ典型主義にすぎる現在の統合理論の分析視座とは根本から異なるものではないかと考えたのである。具体的にいうと、歴史的東南アジア世界では、堅牢な国家システムと宗教という柱によって帝国が確立されることによって商業（交易）が発達したのではなく、商業の発達と国家システムの成立に宗教がたえず利用され続けてきたのではないかとということである。そして、歴史的東南アジア世界の商業と国家と宗教という三者間関係の在り方の違いが、ヨーロッパ典型主義からでは何うことができないこの地域の歴史的要因あるいは歴史的共通性として存在するのではないかと考えたのである。したがって、本稿では、筆者のそのような仮定を立証することを目的とする。そのために、歴史的東南アジアの国家システムおよび国際システム、交易史、そしてヒンドゥー教や仏教およびイスラム教といった宗教とこの地域との係わりとを時系列的に考察することで、三者間関係のありようの違いについて明確にしたいと考える。ところで、筆者は、東南アジア諸国においても、EUのように統合へと向かわせる歴史的要因があるのではないかとこの仮定を立証するために必要な研究書になかなか巡り合うことができなかった。東南アジア世界の歴史を扱った素晴らしい研究書は数多く存在する。ところが、歴史的東南アジアの政治システムや国際政治経済システムを政治史的な視点から考察した研究書を探し出すことが難しかったのである。そのようなときに巡り合ったのが、Donald G. McCloud の *System and Process in Southeast Asia: the Evolution of a Region*, 1986. であった。このマクラウドの本には、紀元1世紀ごろから現代に至るまでの東南アジア世界の政治システムと国際政治経済システムが政治史的な観点から述べられている。したがって本稿では、主に、歴史的東南アジアの国家システムや国際システムの考証に関しては、マクラウドの研究を踏まえるものとする。また、本稿における東南アジア世界の歴史的記述に関しては、桜井由躬雄、石澤良昭、生田茂、桃木至朗、岸本美緒といった東南アジア史研究の先達の記述に大きく依拠している。

歴史世界の東南アジアがどのような国家を発展させ、どのような国際システムを構築していたのか、そして東南アジア世界の歴史の中にはどのような共通性があるのかを考察することにより、現在の ASEAN グループ化の基盤がいっそうよく見えてくるのではないだろうか。

そのために、まず、第一章では歴史的東南アジアの時期区分をおこない、どのような特徴を持つものとして東南アジア世界が形成されたのかを考察する。

## 第一章 伝統的東南アジアの形成

### 第一節 伝統的東南アジアの時期

東南アジア地域の諸国は、ほとんどの国が気候区的には熱帯から亜熱帯気候区に属する高温多雨の地域である。この地域には、豊かな森林資源と農業資源および漁業資源がある。この地域においても、日本とほぼ同じ西暦紀元前後には金属器時代が始まり、稲作も定着したと見なされている<sup>(3)</sup>。この西暦紀元前後という時代は、ローマから中国までのシルクロードが開通した時代であった<sup>(4)</sup>。ローマと中国を陸路で結ぶ「草原の道」と「オアシスの道」が定着した後、「海の道」が開拓された。

この海の道は、モンスーン（季節風）の発見により、大洋航海技術に長けたインド人たちが東南アジアに来航したこと、および中国における秦とそれに続く漢という大帝国の膨張により成立した南シナ海路およびインドシナ半島の陸路利用によって開通した。さらに、ローマ帝国から中国を結ぶ海のシルクロードが成立したことによって、＜米・魚を主食とし、腰布を巻く、檳榔の実を噛むなどといった生活習慣が類似した小さな集落を多数形成していた東南アジア＞<sup>(5)</sup>に国家形成の胎動が開始された。

＜金属器と稲作文化の基盤上に、渡来人の来航による文化的刺激と経済的刺激がもたらされ、この地域に国家形成の動きが生じた＞<sup>(6)</sup>と考えら

れるので、伝統的東南アジアの始期は、西暦紀元前後と設定してよいだろう。

中国に残る歴史書も、正史『後漢書』以降はこの地域に栄枯した様々な国名を現代に伝えている。その代表的なものとしては、扶南（メコンデルタを中心にタイ湾までを支配）・林邑（中部ヴェトナム）などがある。

一方の伝統的東南アジアの終期であるが、これは、15世紀末と考えてよいだろう。ヨーロッパ列強は、香辛料貿易がもたらす富を求めて15世紀始めごろこの地域に進出してきたが、やがて15世紀の末には、貿易利潤の独占をあきらめて陸の支配者となった<sup>(7)</sup>。ヨーロッパ列強は、この地域を武力制圧し、プランテーション経営を開始した。これにより、東南アジアは、伝統的システムから離れ、ヨーロッパ列強が作った世界システムへと組み込まれて行く。また、ヨーロッパ列強は、その植民地経営を容易にするため、新しく作り出したシステムを東南アジアに強制し、伝統的システムを破壊してしまったのである<sup>(8)</sup>。

もちろん、同じ東南アジアの範囲内とはいえ、西暦紀元前後に成立した国家と13世紀前後に栄枯した国家とでは異なる部分も多々あるだろう。しかし、この地域に勃興し没落していった国家は、いずれも国際交易に大きく依存していた<sup>(9)</sup>。そして、その国際交易が、ヨーロッパにおける重商主義の勃興と東南アジアの植民地化によって断たれてしまうと、長い時間をかけて培われてきたこの地域独特の特徴を有する国家が存立しなくなった。

以上の二つのことを考え合わせると、国際交易が開始された西暦紀元前後から植民地化されてしまう15世紀末までが、東南アジアに独自の伝統的国家システムと国際システムが存在していた時期として考えてよいだろう。

## 第二節 東南アジアの伝統的国家の形成

東南アジアにおいて、国家が形成され始めたのは、インド人や中国人の来航により、文化的・経済的刺激がもたらされたためと述べた。モンソー

ンの発見による海上交易路が発達する以前は、この地域では小さな部族社会が互いに競合していた。マクラウドは、この小さな部族社会が国家へと移行していった要因としては、二つ考えられるとし、次のように考察している。

＜第一の要因としては、来航する商人たちの富を収奪するために海賊や強盗が頻繁に沿岸の集落を襲うようになったため、小さな集落が共同して安全保障を行うようになっていったことが挙げられる。＞<sup>(10)</sup>この過程で、より強い傭兵集団をもった集落が周辺集落の安全保障を金銭などによって請け負うようになり、周辺集落の強い集落への安全保障面での依存関係が一般化するようになっていった。連合体の首長たちは、この集落連合体をより強固なものにするために、それぞれ友情や上下関係および姻戚関係を結んだり、自領の一部を連合体に割譲したりした。しかし、その結果成立した国家は、もちろん近現代の国家とは全く異なっていた。連合体は、各集落が経済的利益を追求する上で必要な条件を満たすためだけの存在であったからである。このような成立過程を持つ国家は、多島海である海域東南アジア（現在の国名でいうと、フィリピン・シンガポール・マレーシア・インドネシア・ブルネイであり、以下海域部や東南アジア多島海とする）に多く勃興した<sup>(11)</sup>。

＜第二の要因としては、交易ルート上において重要な戦略的位置を占めた集落や交易品を生産する集落が力を蓄えて、周囲の小さな集落をその覇権下におくことで国家を成立させたことが挙げられる。＞<sup>(12)</sup>＜古代から前近代の東南アジアは、その多くがジャングルや湿地によって覆われており、交通手段として河川が重要視されていた。その河川の河口などにあって外界（交易路）との接点となった集落が、上流あるいは後背地からの交易品を輸出し外界からの交易品を輸入する玄関口として発展した。＞<sup>(13)</sup>このように交易ネットワークを牛耳るようになった集落は、上流や後背地の集落に対して優位に立つようになり、玄関口となる集落を都とし、上流や後背地を支配領域におさめる国家となった。あるいは、交易品を生産する集落

が、生産技術を革新し、集荷市場を形成して周辺からヒトを集め、集約農業と交易を行うようになることで国家が成立した。第一の要因によって成立した国家よりも、より強力な支配力をもったこれらの国家は、東南アジア大陸部（ヴェトナム・カンボジア・タイ・ミャンマー・ラオス以下大陸部とする）に成立した<sup>(14)</sup>。

上記のどちらの国家形成においても、＜東南アジアの伝統的国家にとって最も重要な要因であったのは、マラッカ海峡を通過する海上交易路の発見による経済的利潤の東南アジアへの流入であり、そしてそれを確保・保護するための安全保障の問題であった＞<sup>(15)</sup>とマクラウドは述べている。

また、東南アジアに形成された国家の政治的、宗教的および社会的要素として、ヒンドゥー教（後には、仏教やイスラム教）がある。域外の商人たちによってもたらされたこれらの宗教は、王権の源泉としての役割を果たし、さらには王権を神聖化するために利用された。ヒンドゥー教のカースト制度は、平等の連帯社会を形成していた東南アジアの部族社会を国家機構としてまとめて行くために利用された。主神である王を中心に下位の神である集落の首長が連合を形成して国家となるというシステムは、マンダラ国家と呼称されるこの地域特有の国家システムであった。王と首都は、神と浄土としての体裁をもち、それを誇示するためにさまざまな国家儀礼や祭典および宗教建築をおこなったが、それらの費用には交易によって得られた利潤がつぎ込まれた。王と王を取り巻く在地勢力とをマンダラのようにとらえるこの宇宙感的国家観は、歴史的東南アジアの大きな特徴といえよう。

伝統的東南アジア国家における王は、王自身のカリスマ性と経済力の裏付けによってその地位についていたのであり、稲作文化を共有するといっても、東アジアに見られるような治水・灌漑技術の独占に王権の正当性をおき、神権的専制政治を追求した世襲システムではなかったのである。

さらに、伝統的東南アジア国家では、ヒンドゥー教などの宗教色が色濃く現われた法律が不成文法として通用していたが、通商に関してのみは綿

密な成文法がつくられ、王の取り分とその影響下の集落の取り分とがはっきりと区別されていた<sup>(16)</sup>。このため、王は経済的収入源を確保するため、関税や集落からの上納とは別個に、渡来商人たちから直接上納品をとるシステムを作っていた<sup>(17)</sup>。

以上見てきたように、歴史的東南アジアでは、交易に関する従来からの慣習と諸在地勢力の利害に宗教的正統性をつけ加えた王権の誕生によって、国家形成が開始されたのである。

しかしながら、そのような過程を経て成立した東南アジアの伝統的国家は、それぞれの国家が成立した地域の特徴や国際交易の影響によって様々な形態をもっていた。そこで、第二章では東南アジアの伝統的国家の形態を大きく二つに分類してそのシステムの特徴を考察することとする。

## 第二章 伝統的東南アジア国家の特徴

### 第一節 大陸部の伝統的国家の特徴

東南アジア大陸部における伝統的国家は、前にふれたように、内陸部につながる唯一の交通手段であり国際交易への唯一の接点である河川と河口の集落の支配を行った。河川の支配を確立した王権は、水路を利用するすべてのヒト・モノに対して厳格な課税を行い、富を吸収した<sup>(18)</sup>。その一方で、後背地においては、食料は十分に自給自足可能であったので、交易は後背地の需要を最低限度満たすものであればよかった。食糧自給が可能な在地勢力間の主従関係成立の過程について、マクラウドは次のように考察している。＜交易による富の分配は、河川の支配権を握る王権に大きく依存していたため、王権と後背地の首長間関係は主従関係へと発展していった。すなわち、食糧の自給自足が可能な地域であっても、交易路と交易による経済余剰を支配することが決定的に重要であったのである。＞<sup>(19)</sup>

大河のデルタ地帯での耕作は、ごく最近まで行われておらず、人口が希



薄で未開発であった<sup>(20)</sup>。これは、高温多雨のために平野部では風土病が多く、高度な灌漑・水利技術が一般的に存在していなかったためであった。

それでも、雨季と乾季という気候を利用した水稻栽培技術に支えられた集約農業をもち、交易による経済余剰の追求を行った大陸部の国家は、一方で面的農業基盤を持ち、他方で河川を支配することによって、流動的であったヒトの支配に成功した<sup>(21)</sup>。しかし、伝統的東南アジアの国家のなかでは、このような水利と陸運に恵まれ、そして領域的支配を行う水稻耕作国家は少数派であった。歴史的東南アジア世界に盛衰した国家の多くは、東南アジア世界が属する気候区との関連で領域的支配を志向する傾向が強いとはいえなかった。そのことをマクラウドは次のように述べている。

くまた、王は支配下の集落に対して無制限の権威を持っていたわけではなかった。集落の民衆は、王の専制が強化されてくると土地を捨てて出て行ってしまったからである。農業国家といえども、交易に大きく依存していたため本来資源としてのヒトは流動的であり、また、熱帯（亜熱帯）気候が必ずしも食糧供給を農業に頼らなくともよい状況を作っていたのである。東南アジア大陸部の伝統的国家において、王の無制限の専制的権力の伸張を許さない社会の基本的構造は、社会の要求を越えた強力な政府の出現を阻むものであった。＞<sup>(22)</sup>

そのような特徴を持った伝統的東南アジア国家にも、例外はあった。それがおよそ一千年にわたって中国の支配を受けたヴェトナムである。そこで次の節ではヴェトナムの特殊性について考察を加えることとする。

## 第二節 ヴェトナムの特殊性

東南アジア大陸部に興亡した伝統的国家のなかで、現在のヴェトナム中部から北部にかけて栄枯した国家は、東南アジア大陸部の伝統的国家の中でも特殊であった。中国大陸に強大な帝国が勃興すると、その帝国は勢力圏の拡大をはかって華南からさらに南の東南アジア大陸部に侵入してきた。

これは、マラッカ海峡を通過する海上交易路とともにマルタバン湾から上陸しヴェトナムを通過して中国へと向かう陸上交易路を支配しようとしたためであった。

ヴェトナムには多くの国家が興亡したが、ヴェトナム北部は、秦に征服されて以来長い間中国の支配下におかれ、独立国家が成立したのは11世紀になってからであった。また、ヴェトナム南部に興亡した伝統的国家も、陸上交易路の支配を目指したため、ヴェトナム北部ではたえず中国との武力抗争を展開した。

中国は、1000年来支配下においたヴェトナム北部で中国同化政策をおこなったが、中国の抑圧と搾取に対して土豪や農民たちは反乱と蜂起を繰り返した。このため、ヴェトナムの政情は安定化しなかった。しかし、＜ヴェトナムの伝統的国家は、他の伝統的東南アジア国家と違い、インドやヒンドゥー教の影響よりも中国や儒教および仏教の影響を大きく受けた。＞

＜そして、半独立的な在地勢力連合とそのまとめ役としての王権という伝統的東南アジア国家スタイルから抜け出て、他に先駆けて、強力な陸軍と中央集権制および科挙制を備え、官僚ヒエラルヒーに支えられた国家を形成したのであった。＞<sup>(23)</sup>

このように、大陸部においては、北東アジアに成立した古代帝国ほどではなかったとはいえ、交易だけでなく農業にも産業基盤を依拠し、領域支配的志向を特徴として持った国家が栄枯した。では、海域部においてはどうかだったのであろうか。それを、次の節で考察してみることにする。

### 第三節 海域部の伝統的国家の特徴

海域東南アジアの伝統的国家は、集約農業のための土地環境の欠如と国際交易航路上の戦略的要衝という二つ要因を国家形成の契機として発展した。東南アジア多島海の島々では、大陸部で見られたような面的農業基盤となりうる後背地が存在しなかったため、すべての国家歳入を島嶼間貿易

および国際交易によって得られる経済余剰に頼っていた。この貿易による経済余剰に極度に依存したシステムが、海域東南アジアの首長連合を国家へと移行させたともいえる。

＜海域部の島々では、来航する商人たち相手の風待ち・積み替え・交易品の集散・薪水の補給などを供給する港市が、主要交易ルート上の所々に誕生したそして、それらの港市が国家へと発展していったのである。＞<sup>(24)</sup> その一方で、東南アジアの多島海は、商人たちや港市の蓄えた富を狙って出没する海賊に格好の隠れ家を提供していた。各港市は、海賊や強盗から交易ルートと富を守るために安全保障連合を組んだ。しかし、海上交通と港市における安全保障を行ったことで、来航する商人が増加し交易の機会が増大すると、増加する経済余剰の独占をめぐる首長たちが覇権争いを行うようになった。海域部の集落の首長たちは、経済余剰の再分配と安全保障に関する覇権争いを経て、これらの問題に対する明確な政治的取り決めを結び、国家としての体裁を備えるようになったのである。大陸部と同様に海域部でも、インドから借用したマニ法典などが不成文法として通用していた一方で、実際の王権は無制限に近いものであった<sup>(25)</sup>。しかし、交易に関してのみは、成文法によって王の権威が及ぶ範囲とそれ以外とが、はっきりと区別されていた<sup>(26)</sup>。

海域部の伝統的国家の王権には、大陸部と同様に有力な周辺国の王権が対抗勢力として存在したうえに、来航する富裕で有力な商人たちも時には対抗勢力となった。海域部の王権は、交易ルートと市場の安全保障に正当性の根拠を持ち、「いざ」という場合以外は在地勢力に不干渉という了解の上に成立していた。王室の一員でもなく、時には高利貸であったり外国人であったりした富裕な商人たちは、その蓄えた富の力によって王権に対抗した<sup>(27)</sup>。

経済的利益の追求とそれを利用して王の神聖性を示すことによって維持されていた伝統的王権は、王権維持のための源泉である経済的利益の追求に貪欲であった。王は、有力な商人たちから多くの上納を受けるかわりに、

彼らに重要な政治的地位を与えたり、特別待遇を提供した。その一方で、富裕な商人たちは、王に上納したり賄賂を使ったり、あるいは王の在地対抗勢力に援助を行うことで、海域部の伝統的国家に政治的影響をおよぼし、交易による経済的利潤を追求した<sup>(28)</sup>。政治セクターと経済セクターの結合によって成立した伝統的国家は、むしろ経済セクターの動きに左右される脆弱性を持っていたのである。

海域東南アジアにおいても、山間部などで米の耕作が行われていた。また、米以外にもコショウ・ナツメグ・チョウジ・白檀などの香辛料・香木といった奢侈品が多く生産されていた。海域部では、農業生産物は交易用であり国民が食べるためのものではなかった。食糧は、交易によって賄われており、国家が農作物に対して見いだした利益は、地域内貿易における重要な輸出品としてのものであった。すなわち、東アジアの諸国で見られるような、集約農業を行ってヒトの移動を固定化し、支配システムを強固なものにする目的では、農業を利用しえなかったのである。以上、東南アジアに成立した伝統的国家の特徴を、大陸部と海域部に分けて概観してきた。そこで次節では両者に共通していた特徴について述べたい。

#### 第四節 伝統的国家に共通する特徴

東南アジアの伝統的国家は、大陸部においても海域部においても、確定された国境線によって囲まれた領域国家として成立した訳ではなかった。この地域に栄枯した諸国は、首都を同心円の中心にして、王権が継続的に波及する範囲と王権が散発的にしか及ばない範囲というように、首都から遠ざかるにしたがって次第に王の権威が減退していくような不明瞭な領域支配を行っていた<sup>(29)</sup>。そのため、周辺地域においては、競合する他国と支配領域が重なることもあった。

また、在地勢力連合およびそれらの勢力の交易における権益を侵害しない範囲で認められた王権という構造の伝統的システムは、およそ官僚ヒエ

ラルヒーを構築することができなかった。すなわち、伝統的国家は、強力な軍隊や中央集権システムおよび確固たる領域支配によって成立していたのではなく、交易によって富を生み出すことができた部族社会が、その首長の個人的な繋がりや政治的取り決めによって成立していたものであった。

東南アジアの伝統的国家にみられる、そのような集権的諸制度の欠落という特徴は、これらの国家の生存能力の質の低さを暗示していた。

また、そこにおける伝統的国家の王権は、住民の同意や意志から派生した類のものでもなかった。そこでは、王権を正当化するためのなんらかの根拠を模索する必要があった<sup>(31)</sup>。軍事力とそれによる制圧という方法では、もともと結束力の弱い連合自体が瓦解してしまう可能性が多分にあったからである。伝統的東南アジアの国家で共通して見られたそのような問題に対する解決策は、王に超自然的な性格を与えるというものであった。ヒンドゥー教から教義を借り、それを土着の習俗と混合して、神聖性という正統性を王権に付与したのである。王たちは、この神聖性を誇示するために、交易によって得た経済力を使用し、各種国家儀礼や祭典および宗教建築とその寄進を行ったのであった<sup>(32)</sup>。

概観すると、伝統的東南アジアの国家形成は、不均等なものであった。国家は、この地域のいたるところに興亡したが、それはすべて国際交易および地域内交易と密接な係わりを持っているところであった。また、この地域の国家では、厳格な国家機構が構築されていなかった。東南アジアの伝統的国家は、在地勢力という部族社会の合意上に成り立ったものであったからである。伝統的国家の中で、海上交易や農産物生産のコントロールに成功した国家もあったが、それでも部族社会を深く支配することはできなかったのである。

不完全な王権の一方で、在地勢力は、連合体を作り、自分たちに対する最小限の干渉だけを認めた王権に従うことで、無秩序や混沌から脱出したのである。

また、東南アジアの伝統的文化は、調和と平和に重点がおかれていた。

自然を操作することよりも自然と共存することに重点をおき、強盗や海賊に対して協調して戦うことで社会の安定を追求した<sup>(33)</sup>。＜自然や他者と平和に共存するという東南アジアの伝統的文化は、王と神を一致させるという究極の形態を生んだ。インド文化の平和的拡張や従来からのこの地域の平和性は、他者との協調をもたらし、王を中心とした神の世界を体現しているという独自の世界観となったのである。＞<sup>(34)</sup>

東南アジアの伝統的国家は、東南アジア社会が要求していた地上の、そして宇宙の調和を具現化し、同時に国際交易システムの商業上の要求をも満たすという役割を果たしていたのであった。

### 第三章 東南アジアの伝統的国際関係

#### 第一節 伝統的国際システム

伝統的東南アジアに興亡した数多くの国家は、お互いにあまり密接な国際関係を有していたとは言えなかった。しかし、これらの諸国が構築した国際システムは、その根底にある理念で一致していた。すなわち、伝統的東南アジア諸国の外交政策は、国際交易路の支配と国際交易の独占を求めるといふ点において共通していたのである。そして、各国は、自国による国際・国内両交易の支配と独占を目指す共通の思惑を持ちながら、国際システムを構築していたのである。

東南アジアは、多分に自律的であったが、そのシステムを円滑に運用するために、中国やインドで作られたシステムを利用していた。＜この地域では、国際関係を運営するための成文法がなかったために、おもに中国との関係上で築いた国際儀礼を地域内諸国間関係に、また交易や海上交通にも適用することで東南アジア独自の国際慣習を成立させた。＞<sup>(35)</sup>

東南アジアの王たちは、国家の発展のために、第一に紛争をコントロールすること、第二に増加する人的資源の管理、第三に増大する国内経済の

管理、第四に急激に拡大して行く国際交易への組織的アプローチを行うことが必要であると考えていた。在地勢力の権益をおかさないという限られた範囲で認められていたこの地域の王権であったが、第三と第四に挙げられた国際交易や国内交易へのアプローチは、王に与えられた唯一の特権として認知されていた<sup>(36)</sup>。国内経済と外交の独占というこの王の特権は、王への集権化と王権の正当性の維持という二つの目的を達成させるために使われていた。すなわち、外交（この地域にフローしている交易の富を独占することを目指す対外政策）がもたらす王室の富裕化は、支配領域における王権の卓越性と支持とを生み、結果として第一と第二に挙げた国内政治における王権の伸張をもたらしたのである。

すでに述べたように、伝統的東南アジアは、地理的条件によって海域東南アジアと東南アジア大陸部とに分けられるのであるが、どちらに発展した国家でも、国際交易と交易路の独占的支配を基本的手段として王権の権威を高めるという点で共通であった。いうなれば、伝統的東南アジア諸国では、経済セクターが政治セクターのために利用されるという共通の構造をもっていたのである。しかし、王や首都を中心に描かれる同心円の周辺部に行くほど王権の権威が減退していくという状況は、辺境在地勢力と王室との関係の脆さを物語っていた。そのため、王にとっては、外交政策における敵対国との関係と同様に、辺境在地勢力との関係が重要な問題であった<sup>(37)</sup>。

## 第二節 大陸部の伝統的国家の国際関係

大陸部の伝統的国家においても、王室の富裕化を促すことが外交政策を行ううえで究極の目的であった。王室に富が集中することは、その富を利用して宗教的活動を行うことができるということであり、それは王権の正統性と神聖性を証明することと同義であった。

大陸部の伝統的国家は、とりわけ米の生産に代表されるように農業生産

に対して関心を持っていたが、同時に主要河川を使って行われる国際交易と流域の交易にも関心を持っていた。この意味において、大陸部の伝統的国家は、海域部の商業的交易国家と農業国家の両側面をもっていたといえる。米や香辛料や鉱物および材木といった輸出用の商品は、国家によって関税がかけられ、輸送にも税を課すなど、国家による管理がなされていた。また、河川を利用しての交易路だけでなく、国家対国家および国家対有力商人というレベルでの交易それ自体も、国家の専権事項であった。さらにルビーや金、銀、象牙、サファイアといった高額な交易品は、すべて国家の専売品であった。

大陸部の伝統的国家は、貴重品の専売制度や関税システムによって交易による富を王室に集中させ、同時に農業生産技術（特に乾季の灌漑技術）独占によって地方の集落社会をも支配した。集約農業という求心力を持たなかった海域部の伝統的国家に比べて、集約農業を行う余地があり、在地勢力との間に交易品の生産と交易という分業体制をとることができた大陸部の伝統的国家の方が、支配システムとしては強力であった<sup>(40)</sup>。しかし、このシステムも、東アジアの伝統的国家が構築したシステムに比べると脆弱なものであった。その理由としては、第一に、大陸部の伝統的国家がもっていた灌漑技術といっても初歩的なものであり、東南アジアの自然環境を利用しての拙い技術であったため交易品となるような余剰生産物が出にくかったこと、第二に、交易の支配といっても、巨大な貿易センターをもち海上交通の安全保障を行っている海域部の伝統的国家に依存していたこと、第三に、これらの条件によって確固たる国内分業体制が在地勢力との間に確立され得なかったこと、を指摘できる。

海域部に強大な海軍力と巨大市場をもつ国家が出現すると、海上交通の安全保障が確実に行われるため多くの商人が輸送船団を組んで来航する。しかし、海域部の国家が衰退すると、この地域に来航する商人自体が減って交易が沈下した。大陸部の伝統的国家が輸出していたのは、米や材木および鉱物といった単価が安くてかさばる商品であった。すなわち、船でな



くては運搬しにくい商品が多く、また、海域部の國家が生産していたような大量の香辛料や香木といった特別な生産品ではなかった。そのために、大陸部の伝統的國家は海域部での交易が沈滞化すると交易國家としての側面を後退させ、農業國家としての側面を増大させた。

海域部においては、王権が商業の独占を目指していたため、巨大な貿易センターと國家の中核とが一体化していた。よって、貿易センターの整備拡大が王権の誇示と交易の拡大と連動していた。ところが、大陸部の伝統的國家は、海域部の國家と違って、農業や商業によって得た富で、國家の心臓部すなわち首都を建設しなければならない必要性があった。この場合、建築や儀礼の根拠となるのはヒンドゥー教や仏教の王権神聖化観念とそれによる王室の正当化観念であった。王室は、支配下の資源や富を利用して國家儀礼や宗教建築を行ったが、富の源泉と直結していない政治的權威の維持は、王にとって苦しい負担となった。

さらに、中国と陸上の国境線を共有している東南アジア大陸部の伝統的國家は、中国からの影響を大きく受けていた。漢字の使用や冊封体制への参加、儒教や仏教の影響も中国を通じて東南アジア大陸部に入ってきた。このため、東南アジア大陸部の國家間にも冊封体制が適用されていた。すなわち、大陸部の國家で、より下位にある國家が上位にある國家に対して朝貢を行い、それとは別に中国とそれぞれの國家が朝貢システムを形成していたのである<sup>(41)</sup>。

王権のおよばない在地勢力との軍事力を中心とした関係、中国とのあるいは大陸部内部での冊封体制、および海域部の伝統的國家の盛衰に係わる交易を中心とした関係が、東南アジア大陸部における国際関係であった。

### 第三節 海域部の交易國家と国際関係

海域東南アジアに興亡した國家は、交易都市と交易ルート of 安全保障に支配の根拠を持ち、交易による経済余剰を國家儀礼や宗教建築などに利用

することで支配の正統性を強化していたことは既に述べた。このような支配システムを持っていたために、王室の経済的要求は、外交政策形成過程に直接的で重要な影響力を持っていた<sup>(38)</sup>。海域東南アジアの伝統的国家にとっては、外交政策とは、あらゆる手段を使って王室の物質的富裕化を促進することを最終目的にするものであった。そこで、海域東南アジアの国家は、後背地や各地から集荷されてくる国際交易用のさまざまな商品の管理・専売を行うことを試みた。また、商品の管理と同時に国内および周辺の商業中心地の支配も行おうとした。

海域部では、王室は、富の源泉であるマラッカ海峡を利用した国際交易および海上交通、および多島間交易を、強大な海軍力を使って独占・管理していた。それだけに留まらず、来航する輸送船団に寄港地を提供し、巨大市場に結び付け、それらに関するサービスの提供によって顧客を独占的に引き付ける政策をとっていた。王都における一大交易センターの設置は、後背地への商人たちの直接乗り込みと取引の防止に役立ち、王室による国際交易と多島間貿易の独占を促した<sup>(39)</sup>。また、強大な海軍力によって周辺から来航する輸送船団を護衛する政策は、既存の強国にとってかわろうとする新興国に新たな貿易センターを作らせないための抑止力にもなっていた。

海域東南アジアの伝統的国家の国際関係は、巨大な貿易センターと強大な海軍力を持つ国家が交易品と国際交易および多島間貿易を独占し、周辺国への富の流出を許さない構造で、当時の覇権国（シュリーヴィージャヤやマラッカ王国など）にだけ都合のよいものであった。また、有力国が海上交通の安全保障を担っていたため、有力国の盛衰は国際交易と多島間貿易に直接的影響力を持っており、有力国の盛衰が周辺国の盛衰と直結していることも多かった。しかしその一方で、周辺の弱小国家が海賊行為をはたらくことも多かったため、それを抑止するうえで、交易による富の再分配も有力国の重要な役割であった。

#### 第四節 東南アジアの伝統的国家の国際関係における共通の特徴

東南アジアの伝統的国家では、富それ自体が政治的正当性をもたらす重要な手段であり、富が政治権力の特権であり結果であった。また、この地域の伝統的国家では、王室の財産と国家の財産とを区別する考え方がなかったため、王が富裕になることは国家が富裕化することと同一視されていた。王が交易によって得た富をその権力の正当性の源泉でもある宗教の建築や祭典のために費やすことも王権を維持するために重要なことであった。

また、王を中心としてそれよりも下位の在地勢力が同心円状の支配層を形成するという宇宙観的王権の理解は、平等な主権国家間の安定したシステムとしての多国間関係を構築させにくくしていた。むしろ、この考え方は、権力を伸張し武力を行使して専制的で敵対的な不平等システムを構築させていたといえる<sup>(42)</sup>。

国家とその正当性は、部族的・文化的に決定されていた部分も多かったが、究極的にその国家の専制支配を決定づけていたのは武力を通じた支配領域と権力の拡張拡充であった。国境線は、地理的条件によって固定化されている部分もあったが、その大部分は絶えず変動していた。フロンティアは誰の支配も受けない在地勢力の首長のものであり、この在地勢力と王の軍隊が戦い、王がフロンティアを支配下におくことも重要な権力誇示の手段のひとつであった。しかし、首都から遠ざかるにつれて王の権力・権威は薄れていくのが通常であり、平定したフロンティアを帝国に引き付け続けるには、多くの場合、婚姻関係や血縁関係に頼っていた。

このように、変動する国境および在地勢力との同盟・敵対関係は、マンダラと呼ばれている。このマンダラとは、「王たちの輪」という意味である。各地方に王がおり、首都の王は、それらの王の上に君臨する大君主である。支配領域についても同様の説明ができ、大君主が支配する首都を中心に、大君主の下にいる王たちの支配領域が広がっている<sup>(43)</sup>。しかし、この東南アジアの伝統的諸国のマンダラは、仏教画のマンダラと同様に中心

の大君主が交替すると、周辺の王たちも交替する。東南アジアの伝統的國家の国際システムは、帝国への利権の集中および周辺への軍事的・同盟的拡大とその維持によって専制支配を敷くものであった。ところが、この地域の國家では、東アジアや中世ヨーロッパに発展した土地支配を基本とする封建領主制と異なり、明確な領域概念がなかったために重層的権力分権構造がなく、世襲制が法的に確立していなかった<sup>(44)</sup>。また、この地域の王権は、王を神と同一視し、王権の権威を組織的性質よりも王個人のカリスマ性や神聖性など個人的素質に求めていた。このため、大君主が交替あるいは死去すると、その支配領域や同盟関係に大きな変動が起こり、帝国が帝国として成立しなくなったり、あるいは他の在地勢力が新しい帝国として権力を握ったりするのであった。したがって、東南アジアの伝統的国際システムは、絶えず建設・崩壊・再建設が繰り返されていたといえるのであり、持続性がなく非常に不安定なものであったといえるのである。

帝国の領域内においてさえも、王権の機動力が低く、王の権威にむらがあり、國家機構が不安定で持続的でない、そのような東南アジアの伝統的國家システムでは、それらの國家が作り出す国際システムも不安定であったことは、以上に述べた通りである。だがさらに、国際システムの法的・政治的未発達は、ともすれば国際関係を暴力手段に高度に依存させる結果をもたらした。それは、他國への軍事侵攻ということ以外に、強盗や海賊行為という形で発揮された<sup>(45)</sup>。したがって、逆にいえば、中央がその傘下の周辺領域の安全を保障し、また国際交易・域内交易とその航路を安全保障することが、支配力を強める最も有効な方法だったのである。

ところで、東南アジア地域内の國家ではなく、域外の國家や外国人に安全保障を依存する國家も存在した。例えば、中國の冊封体制下に入り、朝貢を行って従属を容認するみかえりに、同じ東南アジア地域内の他の強力な國家からの軍事侵攻や海賊・強盗からの安全保障を中國軍に依存する國家が存在していた。あるいは、日本人を受け入れて日本人町を形成させ、日本人商人たちの自衛力に安全保障を依存した國家もあった。東南アジア

の弱小国が、域内の大国に従属するよりも域外大国や外国人に安全保障を依存したのにはそれなりの理由があったのである。

すべて東南アジアの伝統的国家は、その政治支配の正当性の根拠作りにも、社会文化的にも宗教的にも、域外大国であった中国やインドのシステムの型に依存していた。そのことは総じて、この地域の諸国が、経済的には国際交易に、政治的には国際交易からもたらされる福利に依存し、域外大国の政治システムの型を受容し、さらに宗教に支配の正当性の根拠を求めていたことを意味している<sup>(46)</sup>。

東南アジアの伝統的国家では、中国からマラッカ海峡を通して地中海へとつながっていく「海のシルクロード」、ならびに日本・中国・東南アジアの三角貿易から得られる経済的利益<sup>(47)</sup>に、その国家の安寧に必要な相互依存関係をもっていた。東南アジア各国は、海を使った国際交易が活発になると、そこから吸い上げた富を使ってインドや中国から吸収したヒンドゥーや仏教の教義を宗教建築や国家儀礼として表現することができ、王権の伸張と拡充を行って繁栄を極めた。ここで特筆すべきは、東南アジア各国において域外大国から借りてくる文化の諸概念は、知的レベルのものであり、組織機構などの具体的システムを借り入れたのではなかったということである。

確かに、中国やインドはこの地域に対して利害関係をもっていたが、それは主に通商関係を通じた経済的理由からであった。インドや中国および外国人商人たちは、この地域の貿易センターで国際市場に向けて綿織物や絹織物および陶磁器や茶などを販売し、金や銀、香辛料およびガラスなどの奢侈品を輸入することに経済的利益を見いだしていた。すなわち、土地の領域的支配には関心がなかったのである<sup>(48)</sup>。この領域的支配への関心の薄さに、東南アジアの弱小国が域外国に安全保障を依存し得る理由があったのである。伝統的に東南アジアの各国は、文化的福利のためにインドや中国のシステムに依存あるいは従属し、経済的福利のためには国際交易システムに依存していたが、その中で発展してきた地域システムは、独特で

自律的であった。域外大国は、この地域に経済的利害関係をもち干渉してくることもあった。しかし、東南アジアは、ヨーロッパ列強がこの地域の国々を植民地化するまで、基本的に外国の支配を受けることがなかったのである。

東南アジアの伝統的国家は、大陸部や海域部において帝国と従属国の関係、あるいは帝国と敵対国の関係というスタイルの国際システムを形成した。しかし、東南アジア全体として俯瞰すると、大陸部においても海域部においても、国際交易に国家の根幹を大きく依存しているという状況は変わらなかった。このため、国際交易と航路に関しては東南アジア各国は協調関係を構築していた。当初は、国際交易路のために安全保障された寄港地を作った。次いで中継貿易のための巨大貿易センターを整備し、同時に国際交易向けの商品（例えば米や香辛料、材木）の生産者として、活発かつ競争的に働いたのである。洋の東西を結び、古代末期から中世期にかけての国際交易の相互依存関係のなかで、東南アジアの伝統的国家は、国際交易の投機的事業に、商人および生産者として良好な交易環境と製品を提供することで、地域ぐるみで協調的に参入していたのである<sup>(49)</sup>。

東南アジア大陸部と海域部は、国際交易において競合しつつも相互補完的な関係を形成していた。大陸部は、島伝いに来航するあるいは陸路でやってくる中国の商人たちを主に受け入れ、海域部は遠洋航海技術に長けたイスラム商人たちを主に受け入れた<sup>(50)</sup>。そのために公用語として商人たちの言葉が採用され、商取引習慣も外国の商人たちのものが使用された。このようにして、国際交易によって仕入れた商品は、大陸部と海域部の域内の交易に利用されたのである。

域外大国からの文化的宗教的影響は、主に知的なものであり、それらは国内支配や国際交易の発展のために利用された。また、干渉はしても土地領域の征服支配は行わないという域外大国の姿勢は、東南アジア諸国に「域外の諸国とは違う」というアイデンティティーを形成させた<sup>(51)</sup>。しかし、それ以上の強固なアイデンティティーあるいはナショナリズムへと発

展することはなかった。これは、域外の諸国が、東南アジアに対して領域的に支配するという帝國的利益よりも、貿易センターおよび珍重な奢侈品の生産者として利用するという経済的利益を見いだしていた結果である。すなわち、この地域の諸国は、経済的条件によって地域的自立性を確保していたのである。さらに、東南アジア地域の伝統的国家は、経済的利益と宗教の政治利用による平和的な領域支配を志向していた。東南アジア地域に見られる独特の経済性と平和性の尊重が、東アジアには見られない独自の地域システムを形成させる原動力となったのである。

## 第四章 東西交易の集散地であった伝統的東南アジア世界

### 第一節 東西交易の影響と東南アジア世界の発展

東南アジア世界は、多くの天然資源に恵まれ、ダイナミックに躍動する商業と交易の一大中心地であった。古代から人類に大変に珍重され、時には投機の対象とされてきた産物の多くは地球上でもこの地帯に集まっている。例えば、香辛料として珍重されてきたクローブやナツメグといった数々の種子や、白檀やサンダルウッドなどの香木は、この東南アジア地域からローマ帝国や漢帝国に輸出されていた。実に2000年以上も昔のことである。古代東南アジア地域は、大西洋からシナ海までの間で海上交易に従事していた船乗りたちにとって、黄金の国だったのである。希少な香辛料や樹木、酒やその他の産物は、東南アジアに集められ、交換されて古代交易ルートに乗って世界各地に散って行ったのである。こうして、古代交易活動の中心地であった東南アジア地域は、船乗りたちによって神秘性と途方もない富に満ちた神話の世界として口承されていったのである。古代アレクサンドリアの天文学者かつ地理学者であったプトレマイオスは、その著書『Geographic Hyphegesis』のなかで、東南アジアを「黄金のヘルソン（港市）」である伝説的な半島として紹介している。また、ローマ帝国によ

ると東南アジア地域は、「野蛮人」によって支配されている神話上の土地であり、古代人が貴重であるとしてきた黄金や動物その他の資源に満ち溢れているところであるとされていた。それらのこの地域に関する古代の記録が大袈裟すぎる感は否めない。しかしながら、この地域が、古代以来、躍動的にかつ積極的に世界交易ネットワークに関係していたことはまぎれもない事実であった。

東南アジアの地理的重要性やさまざまな歴史的要因は、この地域をして「国際的志向」を持たせることにつながった。中国、インド、中近東およびヨーロッパ間の主要な海上交易路上に位置するという戦略上の重要性は、東南アジアをして何百年もの間世界貿易における交易品の一大集散地としての役割を果たさせしめたのであった。

東南アジア地域は、四方を大洋によって取り囲まれていたため、東南アジア地域内での海上交易は早くから発展していた。東南アジア地域では、15世紀末にコロンブスやヴァスコ・ダ・ガマといったヨーロッパ人が初めて大洋横断を成し遂げたより何世紀も以前から、大洋横断の技術をもった船乗りたちが活躍していたのである。古代東南アジアの船乗りたちは、モンスーンの吹き方についての知識を既に得ており、その知識を大洋横断に利用していた。中央アジアが冬の間は、北東の風がふき、その冬の季節風が船に乗った彼らを東南アジアの多島海から交易を目的とした新天地へと運び出してくれたのである。そして、新しい世界から東南アジアの多島海へ帰るときには、彼らは中央アジアへと吹き寄せていく南西のモンスーンに乗ればよかったのである。コンパスや海図無しでも、モンスーンや海流、星の動きおよび多島海に浮かぶ海の要衝の地形によって船乗りたちは何千キロもの航海を成し遂げて来たのであった。今日では、古代東南アジアの船乗りたちが開発してきた航海術が一般に使用されるようになっている。

マレーの船乗りたちは、紀元前3世紀ごろから中国の古代史にその活躍を書き留められはじめた。そして、紀元1世紀ごろには、アフリカ東海岸にまで至る彼らの交易活動の軌跡が明白な証拠とともに刻まれているので



ある。その証拠とは、マレーの船乗りたちが、ローマ時代以前に作り上げた常設的な寄港地かつ村落共同体である。それらの東南アジア的性格を持つ共同体は、東南アジアからアフリカ東海岸までのあいだに点在していた。そして、それらの名残は、今日においても伝統や慣習および伝承として各地に残っている。また、古代東南アジアの船乗りたちは、その航海によって植物分布にも影響を与えている。たとえば、バナナやココナツ、タロイモおよびその他のさまざまな東南アジア原産の植物が、彼らの交易活動ルート沿いに発見され得るのである。

大陸を横断するシルクロードよりも何年も前から、マレーの船乗りたちはシナモンを積んでモンスーンに乗って、シナ海からアフリカ東海岸のエチオピアひいてはヨーロッパにまで交易にでかけていたのであった。このような海上交易は、少なくとも紀元前3世紀には活発に行われるようになっていた。この地域が先駆的に起こった長距離交易は、実にグローバルなものであった。そのため、少なくとも3世紀から19世紀に至るまで、東南アジアは、世界貿易の一大中心地だったと言えるであろう。交易における東南アジア地域の重要性は、世界が工業化時代に突入するまでの1000年以上もの間、この地域の島嶼部が産出しそして世界に向けて運び出されていたスパイスが世界貿易の始点であったことに由来していた。

交易と、国際交易ルートを通じて得られた刺激とは、東南アジア世界において最初の国家が誕生する際に、その建築文化、宗教概念、政治概念の導入および富の蓄積に最大の影響を与えた。東南アジアでは、大陸部の国家においても島嶼部の国家においても国際貿易の中心地としての自覚が、東西交易へのサービス問題を国家の最優先事項とさせた。貿易の中心地としての自覚は、域内の商業活動を世界貿易のルートに結合させる推進力ともなった。個々の貿易港と国家の盛衰は、国内および商業的諸要素の関連に左右されるという特徴があった一方で、世界貿易の中心地としての東南アジア地域の役割の重要性は、安定的に推移していったのであった。インドや中近東および地中海世界のローマ帝国による中国絹の需要が、これら

の地域から東南アジアを経由して中国へと至る交易路の形成や交易を担う外国人商人の活躍をもたらした。その過程で、各地域の特産物が交易ルートに乗せられ世界各地に紹介されたのであった。東南アジアの白檀やサングダルウッドなどは、そのような交易商人たちの活動によってお香を作る際の貴重な原料としての地位を築いたのであった。さらに、スパイスもまた、東南アジアの広大な熱帯雨林の原産品で、交易商人たちの手によって世界に広められたことにより最も重要な世界交易の商品となったものだったのである。例えば、スマトラ島の北西海岸には、薬やワニス（光沢を出すための塗料）、香料として高い価値のあった樟脳を輸出する貿易港があった。モルッカ諸島で生産されたナツメグやクローブなどのスパイスが世界貿易において最も珍重された東南アジアの商品であったことは既に述べたとおりである。

紀元一世紀には、インドの商人たちは、自分たちが商っている中国絹の原産地を探して海上を東に航海し、東南アジアに到達した。そのような海上ルートの伸長は、東西交易の西の終着点であるローマ帝国と東の終着点である漢帝国が全盛期を迎えたという国際情勢も手伝って、新しいそして真の国際交易路の一環としての発展を遂げたのであった。中国からの商品は、東南アジア大陸部、インド、中近東および地中海を経由してローマ帝国に至った。また、ローマ帝国などからの商品は、その逆をたどって中国に至ったのであった。

東南アジアは、そのような交易ルートの重要な拠点の一つを提供した。その一方で、この交易は、東南アジア大陸部の交易品の集散地に中国正史に登場する最初の国家を形成させたのであった。現在のタイの東海岸に勃興した国家は、中国正史によると、扶南（ふなん）と記録されている。そこは、中国交易の重要な係留地の一つであり、アジア商品の主要なマーケットであった。扶南の主力貿易港は、メコンデルタの西の端にあり、そこからタイの海岸にもつながっている巨大な運河ネットワークによってさまざまな商品が集散されていた。扶南は、中国やインドおよび中近東の商人た

ちに薪水を給与し、残りの行程に必要な食料や交易品を供給した。また、モンスーンを待ってこの地に係留する商船隊は、時には5カ月以上も留まることがあったが、人口扶養力の大きいメコンデルタがそれを可能にしたのであった。食料にも水にも森林資源にも恵まれたメコンデルタが、扶南を國家としての地位に押し上げたといえよう。扶南が、交易に係わる商人たちを引き寄せることに成功したもう一つのポイントは、そこが東南アジア域内貿易の集散地でもあり、域内貿易品のアウトレット商品を國際交易商人たちに提供できたという点である。扶南の住民や東南アジアの人々にむけての域内商品が、國際交易商人にも入手できたのである。そこで、交易商人たちの目に留まったのが、スマトラやティモールからのスパイスや香木なのであった。とりわけ香木は、中国での需要が多い割にアフリカやアラビアから持ってこなくてはならないコストパフォーマンスの悪い商品であった。それが、東南アジアで、乳香や没薬に代わる香木が手に入るようになったのである。さらに、扶南を経由したことによって、樟腦や螺鈿用の貝殻、熱帯雨林の美しい鳥およびモルッカのスパイスが新たに國際交易商品として登場したのであった。

6世紀ごろには、扶南の東西交易における役割は、バイパス以上の意味を持つものになっていた。5世紀ごろから、航海術のさらなる発展によって、ベンガル湾からタイ東岸への近道としてのマレー横断の代わりにマラッカ海峡が使用されるようになっていた。6世紀に入っても、商人たちの主な交易目的は、中近東の香料や薬と中国絹の交易であったが、東南アジアの商品も東西交易に参入したことによって、東南アジア域内の連環性が高まった。とりわけ、海域部の島々の関係が緊密化した。新時代の國際交易路は、交易による福利を享受し得る東南アジア地域を拡大させたのであった。マラッカおよびスダ海峡をまわる新しい交易路は、商業中心地を大陸部から海域部へと移動させた。後に大陸部に盛衰したアンコール朝やパガン朝およびアユタヤは、域内貿易および國際交易の発展に大きく貢献したが、扶南のように國際的交易品の集散地として発展したわけではなかつ

た。それらの国家は、交易の活発な海岸沿いと広大な後背地を融合させて「政治と経済のヒエラルヒー的ネットワーク」を構成したことに特徴があるのであった。しばしば、アジアにおける政治経済を考えるうえにおいて、「アジア的生産様式論」が問題となる。これは、東洋諸国では、王のみが自由でそのほかの国民は、すべて奴隷であり、それが東洋諸国の停滞の原因だという18世紀以降にヨーロッパで広まった東洋的専制概念を基礎とするものである。マルクスは、アジア的生産様式は、小宇宙的村落共同体と灌漑技術および戦争機能の王による独占によって特徴づけられるとした。そのような説明は、東南アジア諸国とりわけ大陸部に興亡した国家にも当てはめられてきた。その説明の根拠は、「年に三回米がとれる」といったアンコール朝の古文書の表現や、現代に残る運河の遺構であった。しかし、稲作については、今日では乾季に低湿地で米作を行い、雨季に高地で稲作を行うという耕地移動を行うものであったことや、栽培されていたのが北東アジアと違って陸稲であったということが分かっている。すなわち、北東アジアのように、灌漑技術が稲作と密接不可分であったとはいえないのである。さらに、都市を取り巻くように発達していた運河も、水稻栽培などの農耕用には向かない規模と作りであったことが航空写真の撮影と分析によって判明している。つまり、歴史的東南アジア世界に対しては、北東アジアの政治経済機構を理解するための説明では、分析しきれていないことが多いのである。また、交易に依存しない土地支配型のアンコール朝は、チャオプラヤ川流域に勃興した交易依存型のシャムや海岸沿いに勃興したチャンパーによって圧迫され、消滅した。東南アジア大陸部では、そこに興亡した諸国家は、次第に交易依存へと重心を移し、なおかつ河川の流域に沿って国際交易の盛んな多島海へと南下していったのである。

さて、7世紀には、ムシ川河畔（スマトラ島の北東海岸沿い、現在のインドネシアパレンバン）にシュリーヴィージャヤが成立した。シュリーヴィージャヤは、東南アジアを通る新しい海上ルートの主要港かつ国家として発展した。シュリーヴィージャヤは、マラッカ海峡や新しい交易ルート沿い

に生じたライバルを征服しながら、域内および国際交易の仲買人として11世紀まで繁栄した。11世紀ごろになると、国際交易および域内貿易の中心地は、さらに南東に移動した。東ジャワに新しい国家チョーラ朝が誕生し、2度にわたる戦いの後、シュリーヴィージャヤは滅亡していった。東ジャワに興亡した一連の国家は、国際交易と域内貿易を16世紀始めころまで独占的に支配した。その中でも最も有名かつ強力な国家は、マジャパヒト王国であろう。マジャパヒト王国は、モンゴル帝国の侵入を防ぎ、全盛期には、マラッカ海峡から香辛諸島までを独占的に支配する国家となっていた。しかし、元に代わって成立した明帝国が再び東南アジアに進攻してきたときには、内戦を行っていたマジャパヒト王国はすっかり弱体化していた。そのため、明帝国による支配を免れることができなかった。また、15世紀には、香辛料貿易が巨大化しすぎてしまっており、弱体化したマジャパヒト王国がヨーロッパ諸国と競合しながらそれをコントロールすることは不可能になっていた。マジャパヒト王国の勢力減退によって、マラッカ海峡には、マラッカ王国が登場したが、この王国は中国と同盟を締結した。中国の武力という傘の下で、マラッカ王国は勢力を伸ばしていった。しかし、マジャパヒト王国をはじめとした新しい国際交易ブームに乗じて成立した国家は、交易による収益に国家財源を依存していた。究極的には、交易への国家財源の依存が東南アジアのイスラム化を招いたのである。東南アジア諸国の新しい宗教への積極的適応という姿勢に、東南アジア諸国にとっての国際交易の重要性がうかがえよう。そうして、14世紀終わりごろには、イスラム教は、東南アジア海域部に広がっていた。そして、イスラム教の広がりが、弱体化していたマジャパヒト王国の支配の正当性をさらに失わせるものであったのであり、1528年、マジャパヒト王国は滅亡したのであった。

## 第二節 東南アジアのイスラム化

国際交易は、東南アジア諸国に莫大な富と財産をもたらした。しかしながら、国際交易によって、さまざまな新しい宗教や政治的な考え方がもたらされ、それらがこの地域の慣習や伝統に融合して行ったという事実も等しく重要であろう。東南アジアにイスラム教が到来する以前に、外からこの地域にもたらされた重要な思想は、インドおよび中近東の宇宙論であった。ヒンドゥー教や仏教も東南アジア世界の大陸部および海域部の国家において重要な役割を果たすようになっていった。誇大広告になってしまうという危険を犯してこの現象を名付けるとすれば、東南アジア世界のインド化がおこったのである。しかしながら、東南アジアのインド化は、インドからの大量の移民によって生じたものではなかった。インド化をもたらしたのは、この地域を通っていた初期の交易ルートに乗って東南アジア世界にやってきたインドの交易商人や僧侶および学者たちだったのである。そして、歴史的東南アジアの首長たちや支配者たちが、自分たちの権力の伸長や拡大および支配の正当性の確立を目指してそれらの人々を積極的に受け入れたことによって、インド化は推進されたのであった。海域部の諸国では、ヒンドゥー教や仏教の遺跡が多く見られる。そのことによって、それらの宗教が歴史的東南アジアの国家に与えていた影響の大きさがうかがえる。しかし、その一方で、最も強い影響力を持ったのはイスラム教であった。イスラム教は、ヒンドゥー教や仏教と同じように、インド、東南アジア、中国を結び付けていた海上交易ルートを経由して東南アジアに到来した。13世紀終わりごろには、スマトラ島に東南アジアで最初のムスリム国家が成立した。

東南アジアのイスラム化は、13世紀ごろまでに東西交易活動がさらに活発化していたという背景の中で考えられなければならない。11世紀終わりごろから、ヨーロッパでは、十字軍の中近東派遣が断続的に繰り返された。中近東に進出した十字軍は、スパイス交易に携わることによって、利益を

あげようとした。そこにエジプトのマムルーク朝が管理支配していた紅海・スエズ交易路が結合したのである。インド洋を横断して形成されていた交易路と地中海のスパイスロードとが十字軍運動によって結合したのである。そして、それをきっかけに、ヨーロッパ商人の東西交易活動への進出が積極的になされ始めたのであった。一方、東のアジア大陸においては、明帝国が南海貿易に積極的に乗り出していた。また、日本人商人たちも、琉球や台湾、フィリピンを経由して東南アジアに至り、交易活動に従事していた。こうして、中国からヨーロッパに至る海上交易ルートが一つに結合し、その上を多くの物資および人が行き来したのであった。さらに、そのような海上交易の活発化に伴って、交易ルート沿いの小さな村落共同体は、急激に発展していった。しかも、それら急激に発展した交易都市は、多くの外国人商人たちの影響を受け、コスモポリタンな性格を備えていた。東西交易の活発化に伴う東南アジア諸都市の交易都市としての急激な発展とそれによる社会の急激な変化が、東南アジア世界のイスラム化を生じさせしめた一因であったといえよう。

イスラム教は、世界の三大宗教の中でも最も交易に向いている宗教であった。ムスリム商人たちが、コーランやハーディースの厳格な教えと戒律に従う姿勢が信用するに足る商人としてのイメージを他者に与えたからである。さらに、交易に従事することが、決して容易な仕事ではなかったこともイスラム教の拡大につながった。熱帯雨林や大河、モンスーンの吹き荒れる海上を行き来することは、決して容易なことではなかった。そして、長距離を移動する交易商人たちは、どこでも通用する信条を必要としていた。自分の本拠地だけで通じる言葉や宗教だけではなく、交易都市のどこであっても通用する言葉や宗教を求めていたのである。そのような条件に合致したのがイスラム教だったのである。たった一つ、アラビア語で書かれているコーランだけを正当として、コーランやハーディースの厳格な教えや行動規範に従えば、それがイスラム教信者という集団に保護されるための必要十分条件であったのである。すなわち、イスラム教の戒律の厳

しさやその堅持がイスラム世界の普遍性へとつながっていた。そして、その普遍性が、世界を股にかけて交易するイスラム商人たちにとって、国家を超えた国際ネットワークを提供する基礎となっていたのである。

東南アジア世界は、交易を国家の基盤としていた。そのために、交易活動をより容易にし、活発化させるイスラム教を受容して行っていたのであった。また、13世紀ころには東南アジア世界の交易の中心地は、ジャワ島やスマトラ島といった海域部に興亡した国家であった。そのため、イスラム教の受容は、海域部から開始されていたのである。しかし、東南アジア世界全体にイスラム教が流布する前に大きな変動が生じた。ヨーロッパ帝国主義各国が、東西交易の利益の独占をめざして交易の活発な中心地の一つであった東南アジアに進出していた。ところが、アラビアからのイスラム商人や中国商人および在来の商人たちの交易における利権システムは、よそ者への柔軟性を持っていた一方で堅牢でもあった。ヨーロッパの商人たちは、交易に参入はしたものの、意図していたような交易の利益独占を達成できなかったのである。そのような背景も手伝って、帝国主義列強は、東南アジア諸国を植民地化する方向へと政策を転換した。そして、そのヨーロッパ列強による東南アジア植民地化の過程で、最も最初に槍玉に上がり、徹底的に排除されたのがイスラム商人たちであった。そのため、東南アジア世界では、海域部に見られるイスラム教の影響や浸透が、大陸部においては観察されないのである。すなわち、ヨーロッパ列強による東南アジア世界の植民地化に、東南アジア地域の現在の宗教的差異の端緒があるのである。

東南アジアには、インド化およびイスラム化のプロセスの顕著な例外が二つある。それがフィリピンとベトナムである。フィリピンは、インドと中国を結ぶ主要な交易ルートから地理的に離れていた。そのことが、フィリピンをしてインド化やイスラム化の影響を免れる要因となったのであった。今日のフィリピンでは、東南アジア世界に最後に到来した世界宗教であるキリスト教の信者が大勢を占めている。それは、マゼランがこの地に



立ち寄った際にもたらされ、続くヨーロッパ列強の帝国主義支配の過程で拡大定着したものである。もう一つの例外であるベトナムは、紀元2世紀ごろからおよそ1000年にわたって中国の支配を受けていたことが、ベトナムのインド化を免れた要因であった。また、ベトナムに到来した仏教は、中国を経由してきたため、タイやミャンマーなどの隣国では小乗仏教が主流なのに対して、大乘仏教が流布している。

いままで、東南アジアに影響を与えたさまざまな事柄について述べてきた。しかし、東南アジア世界は、交易によってもたらされたさまざまな刺激をむやみやたらと受容し適合してきたわけではない。すべての刺激は、東南アジアの人々の自律的な取捨選択によって淘汰されてきたのである。その取捨選択の基準とは、王権の正統性や神秘性を助長し、権威を高めるものであるか否かというものであった。例えば、東南アジア世界では、広範にわたってインド化（ヒンドゥー化）が観察されるが、東南アジア社会にはインド社会に現存しているようなカースト制度は見当たらない。インドのサンスクリット文字は、宮廷文字として受け入れられたが、下層の人々にまで行き渡るものではなかった。東南アジアの人々は、例えば農業のような重要な分野で独自の水稻栽培技術を確立したように、輸入した知識や技術とは区別されるべき発展も遂げていたのである。

要するに、インドや中国といった域外大国から膨大な知識や技術がこの地域にとり入れられてきた。しかしながら、それらのものが、東南アジア世界の土着の文化や慣習を全て飲み込んでしまうことはなかった。東南アジアに到来し影響を与えた全ての域外大国の文化、例えば、インドや中国そしてイスラムのそれらは、全て交易の後についてこの地域に流入してきたのである。

東南アジア世界の人々が、貿易港や国家の交易志向的な発展と海外交易ネットワークの伸長に積極的で自律的な役割を果たしていたことは明確である。伝統的東南アジア国家の交易志向や海外への交易ネットワークの伸長という現象は、ただ外からの働きかけやその受容によってのみ生じたも

のではない。むしろ、それらの現象は、東南アジアに興亡した初期の国家が交易の価値を認め、および社会の急激な発展に対応した結果生じたものであるとうけとめたほうがよいだろう。東南アジア地域では、広大な熱帯雨林や海、大河という地理的自然条件のせいで人々や集落間関係は疎遠な状況にあった。しかし、交易の発展が、東南アジア社会に、社会的、文化的小および経済的につながりを持って発展する機会を与えるものとして働いたのである。つまり、東南アジア地域は、交易活動によって、社会・経済的に一体性を持つ地域として凝集していったのであるといえよう。

しかし、ヨーロッパで産業革命が進行し、交易による利益の独占を目指して世界各地に進出してきていたヨーロッパ勢力が、重商主義的政策から帝国主義的政策へと転換を始めると、一気に東南アジアの植民地化が進み、この地域の凋落が始まった。東南アジア世界は、ヨーロッパ列強による植民地化のために、東西交易活動における自律的かつ積極的なアクターとしての地位を失ってしまった。さらには、ヨーロッパ列強によって再編された世界貿易のなかで、ヨーロッパ市場に一次産品を輸出するための補完的な地位に陥れられたのであった。東南アジア植民地化の過程で、古代ローマ帝国や中国に盛衰した帝国の皇帝たちが珍重した数々のスパイスを産出していた広大な熱帯雨林は、特定の作物だけを栽培するプランテーションへと作り替えられた。また、船に乗り、モンスーンに乗って、世界を股にかけて活躍した東南アジアの商人たちは、プランテーション農業の従事者へと改編されていったのであった。

## お わ り に

東南アジアに形成された伝統的国家システムと国際システムは、持続性のなさや不安定さ、そして高度に国際経済に依存するという特徴をもっていた。

伝統的国家システムにおいて、王は神と同一視され宇宙観的王権の理解

がなされ、支配の正統性の根拠ともなった。しかし、灌漑技術や戦争機能の王への集中という事態には至らなかった。これは、東南アジア諸国が熱帯から亜熱帯に位置し、広大深遠な森林によって大規模な面的支配が阻害されていたことと、その森林資源による食糧供給によって、灌漑技術の独占が東アジア諸国で見られるように重要な地位を占めることが難しかったからである。また、東南アジアが、国際交易路上の要衝に位置しかつ珍重な奢侈品を生産する生産地であったことも、国際交易を活発化させる要因となっており、伝統的国家が収奪対象としての人民と農業を支配する意欲を低減させるのに一役買っていた。豊富な物的資源と経済上の特性に対して、人的資源が希薄であったことは、伝統的国家の王と在地勢力の分離、在地勢力の自律性をもたらした。さらに、国内における分業体制の未分化は、確固たる土地支配領域をもった帝国の発展を阻害した。このため、帝国への志向は、周辺支配の根拠を宗教行為や国際交易の利益独占に求めるにとどまった。しかし、王権が国際交易の盛衰や王個人のカリスマ性とコネクションに大きく依存した状態であったため、その「帝国」は非常に不安定であった。

宇宙観的王権の理解は、国際関係にも持ちこまれ、平等な主権国家による多国間関係という国際システムを構築することができないという限界をもたらした。よって、「帝国主義的な」同盟・敵対関係が国際関係の基礎となったのである。国内支配システムにおいて、在地勢力の一つが国際交易や域内交易の経済的利益を独占し、その利益を宗教行為に寄進することによって、王としての権威を得ていたように、「帝国」の王も周辺国からの交易による経済的利益の収奪と交易路の安全保障および宗教行為によって権威付けをしていたのである。しかし、「帝国」の王権も組織的特性によって権威付けられていたのではないいうえに、王個人の資質に権威を求めていたため、中核の国家の王に変動があるとその王を中心とした国際システムも崩壊してしまうという不安定さであった。

東南アジアの大陸部と海域部は、それぞれの地理的条件から、異なる発

展をした部分も多かったが、全体としてみると、王権の脆弱性や非連続性、政治支配の正当性の経済と宗教への高度の依存という共通性が見られる。また、国家生存のための国際交易への依存度の高さは、二つの地方の伝統的国家の共通の特徴として特筆すべきものがある。この国際交易への依存は、また東南アジアの伝統的国家を協調させる原動力として機能したのである。

このように、国際交易に大きく依存していた東南アジアの伝統的システムは、在地社会の生産関係が東南アジア地域の内部からその形成を促されたものとはいえない。しかし、この地域の伝統的な国家も国際システムも、域外からの圧力や影響によってとはいえ、自律的にかつ独自の発展したものであった。ゆえに、東南アジアの伝統的システムにおける域外からの要因（国際交易の発展や中国・インド・アラブなどからの商人の来航とそれに伴う文化的影響の流入）を強調することにより、この地域の自律性を否定することは正しい見解とはいえない。ちょうどASEANを形成する際の東南アジアの政治環境において、冷戦体制とインドシナの影響が強調されるが、必ずしもASEANが国際環境に対する受動的対応だけではおわらなかったように。

このように、東南アジアの伝統的システムは、国家と交易が相互依存の関係にあり、また、宗教に代表される外来の文化をたえず利用し続けたという点において独特であった。それは、脆弱であり、同時代に他の地域で形成されたシステムから見れば、平和的だが欠陥も多かった。しかし、東南アジア地域の国際経済的利害に基づく地域内協力と国際システムへの協調、そして平和性という伝統的特徴は、グローバリゼーション時代における東南アジア地域の協調体制が決して昨今にわかに浮上したものではないことを物語っているといえるのである。

#### 注

- (1) EU (EUROPIAN UNION) を日本では、「ヨーロッパ (欧州) 連合」

と訳すが、「欧州同盟」とするべきだという見解もある。

児玉昌己「『欧州連合』という日本語表記問題再訪」同志社大学ワールド  
ワイドビジネスレビュー第三巻、2002年3月号、参照。

- (2) ここについては、以下の文献を参照し、要約した。

増田四郎『ヨーロッパとは何か』岩波新書、1967年、2-3頁、5-7頁参照。

同『社会史への道』日本エディタースクール出版部、1981年、85頁、89-  
90頁参照。

F. レーリヒ『中世の世界経済』瀬原義生訳、未来社、1969年、pp.37-38、  
75-76.参照。

- (3) 東南アジアの歴史についての記述については、以下にあげる文献を参照し、  
引用している。

桃木至朗『歴史世界としての東南アジア』山川出版社、1996年、11頁。

- (4) 詳しくは、次の文献を参照されたい。

岸本美緒編『東アジア・東南アジア伝統社会の形成』岩波書店、1998年、  
3-9頁参照。

- (5) 岸本美緒編、同書、4-5頁参照。

- (6) この記述に関しては、以下の文献を引用したものである。詳しくは、それ  
らを参照されたい。

桃木至朗、前掲書、11頁。

岸本美緒編、前掲書、193頁参照。

石澤良昭・生田滋『東南アジアの伝統と発展』中央公論社、1998年、145-  
146頁参照。

- (7) 桃木至朗、同書、25頁。

- (8) Cf. Donald G. McCloud, *System and Process in Southeast Asia; the evolution of a region*, Westview Press, 1986. pp.111-112.

- (9) Cf. Donald G. McCloud, *ibid.*, pp.93-115

岸本美緒編、前掲書、193-202頁参照。

- (10) Cf. Donald G. McCloud, *ibid.*, pp.82-85, 103,106-112

- (11) Cf. Donald G. McCloud, *ibid.*, pp.63-83

- (12) 東南アジア海域部における国家の成立要件に関しては、次の文献を参考と  
した。また、成立した諸国家は、その形態によって様々に分類されているが、  
本稿では割愛させていただいた。

Cf. Donald G. McCloud, *ibid.*, pp.65-67

岸本美緒編、前掲書、193-194頁参照。

石澤良昭・生田滋、前掲書、113頁参照。

- (13) 岸本美緒 編、前掲書、193-196頁参照。

- (14) 桃木至朗、前掲書、16-21頁。  
石澤良昭・生田滋、前掲書、165-216頁参照。
- (15) Cf. Donald G. McCloud, op. cit., pp.67-72
- (16) Cf. Donald G. McCloud, ibid., pp.82-84  
桃木至朗、前掲書、43-44頁参照。
- (17) Cf. Donald G. McCloud, ibid., pp.83-85
- (18) 岸本美緒 編、前掲書、195頁参照。
- (19) 岸本美緒 編、同書、193-213頁参照。  
石澤良昭・生田滋、前掲書、167-174頁参照。
- (20) 桃木至朗、前掲書、56頁。
- (21) 桃木至朗、同書、72頁。
- (22) Cf. Donald G. McCloud, op. cit., pp.70-72  
李成市『東アジア文化圏の形成』山川出版社、2000年、7-19頁参照。
- (23) この部分の記述に関しては、次の文献が詳しい。  
石澤良昭・生田滋、前掲書、191-195頁参照。
- (24) 岸本美緒 編、前掲書、195頁。  
石澤良昭・生田滋、前掲書、97-98・170頁参照。
- (25) Cf. Donald G. McCloud, op. cit., pp.82-83.
- (26) Cf. Donald G. McCloud, ibid., pp.82-83.
- (27) Cf. Donald G. McCloud, ibid., pp.84-85  
石澤良昭・生田滋、前掲書、81-91頁参照。
- (28) Cf. Donald G. McCloud, ibid., pp.84-85.  
石澤良昭・生田滋、前掲書、97-139頁参照。
- (29) 桃木至朗、前掲書、71-72頁参照。
- (30) Cf. Donald G. McCloud, op.cit., pp.72-74.
- (31) 桃木至朗、前掲書、29頁参照。
- (32) 桃木至朗、同書、57-58頁参照。  
石澤良昭・生田滋、前掲書、172-173頁参照。
- (33) Cf. Donald G. McCloud, op. cit., pp.83-84.  
石澤良昭・生田滋、前掲書、101頁参照。
- (34) このような、東南アジア世界の独自性については、以下の文献を参照した。  
石澤良昭・生田滋、前掲書、172-181頁参照。  
桃木至朗、前掲書、64-66頁参照。
- (35) 歴史的東南アジアの国家システムと国際システムの連関性に関しては、本文中でも述べたように、次のマクラウドの文献に詳しい。  
Cf. Donald G. McCloud, op. cit., pp.92-95.

- (36) Cf. Donald G. McCloud, *ibid.*, pp.91-92.
- (37) Cf. Donald G. McCloud, *ibid.*, pp.96-98.
- (38) Cf. Donald G. McCloud, *ibid.*, p.95.
- (39) Cf. Donald G. McCloud, *ibid.*, p.95.  
石澤良昭・生田滋、前掲書、141-145頁参照。
- (40) 石澤良昭・生田滋、前掲書、165-167頁参照。
- (41) Cf. Donald G. McCloud, *op. cit.*, pp.96-97.
- (42) Cf. Donald G. McCloud, *ibid.*, p.100.
- (43) 桃木至朗、前掲書、62頁参照。
- (44) 桃木至朗、同書、64頁。  
Cf. Donald G. McCloud, *op. cit.*, p.99
- (45) Cf. Donald G. McCloud, *ibid.*, p.103.
- (46) Cf. Donald G. McCloud, *ibid.*, p.111.  
岸本美緒 編、前掲書、21-31頁参照。  
石澤良昭・生田滋、前掲書、81-106頁参照。
- (47) 国際交易ルートは、ユーラシア大陸およびアフリカ大陸北部や東海岸部に存在するすべての地域を網羅して成立していた。また、国際交易に東南アジアや東アジアの商人たちが果たした役割は大きなものであった。詳しくは以下を参照されたい。なお、ライドの著作には、東南アジアのイスラム化の過程についても詳細な分析がなされている。本稿の考察も、ライドの研究に依拠している。  
桃木至朗、前掲書、24-25頁参照  
李成市、前掲書、24-25頁参照。  
Cf. Anthony Reid, *Charting the Shape of Early Modern Southeast Asia*, Silkworm Books, 1999. pp.56-84
- (48) Cf. Donald G. McCloud, *op. cit.*, pp.108-108.
- (49) Cf. Donald G. McCloud, *ibid.*, p.107.  
石澤良昭・生田滋、前掲書、80-83頁参照。
- (50) Cf. Donald G. McCloud, *ibid.*, pp.79-87.
- (51) Cf. Donald G. McCloud, *ibid.*, pp.107-108.